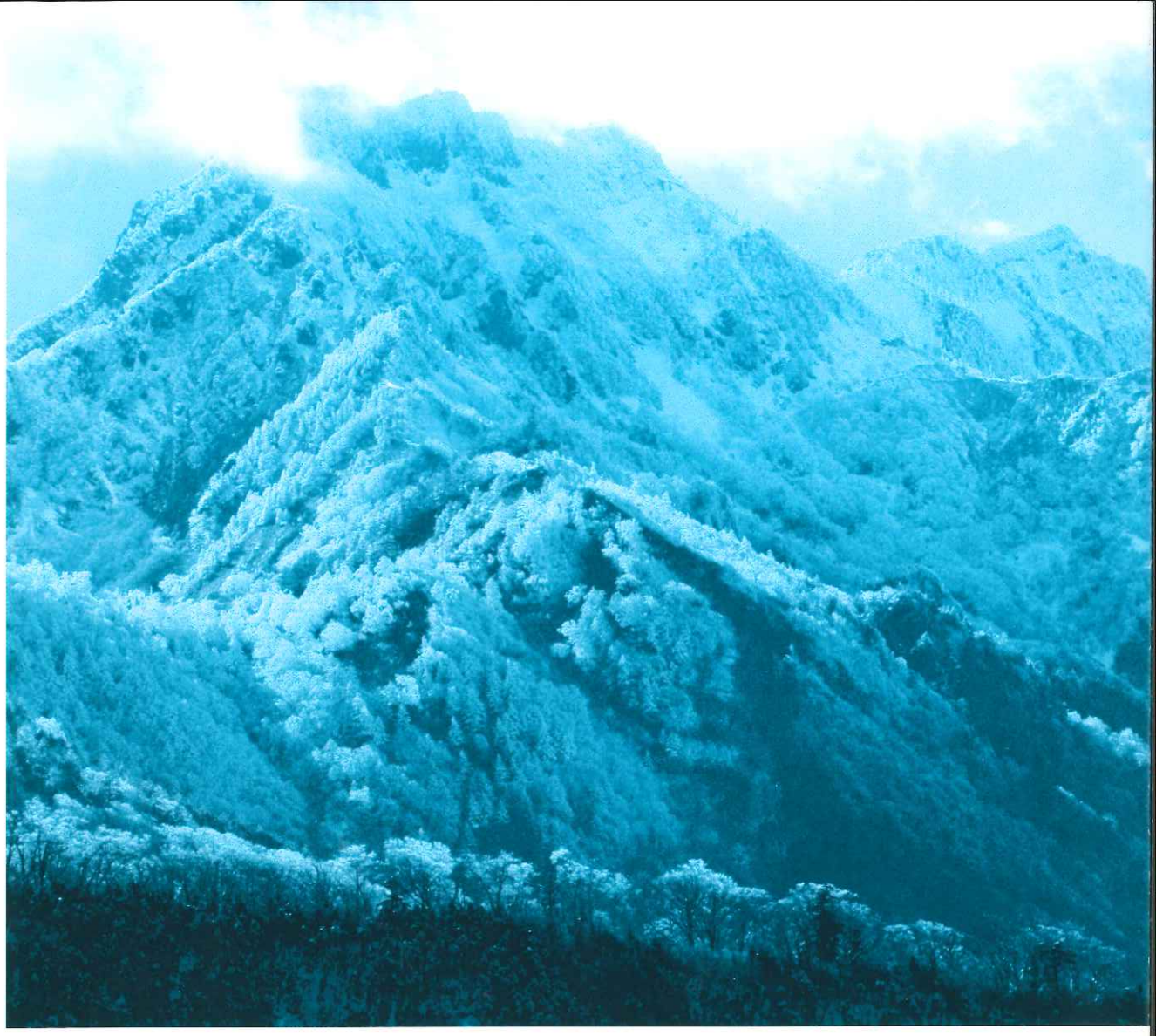
高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.19



●「石鎚の霧氷（本川村よさこい峠）」（写真提供／横田鐵喜）

リレー随筆⑲　心のふるさと――髙辻　玲子

私が初めて高知を訪れたのは、昨秋五周年を迎えた県立文学館の開館記念特別企画展「漱石と寅彦の留学体験」に、夫の祖父・髙辻亮一の留学日記が展示されたときのことでした。

今は昔、「明治生命保険株式会社」（当時の名称）からドイツに派遣された亮一は、最初の留学地ゲッティンゲンで、帰国間近の寺田寅彦と数ケ月滞在を共にしています。

亮一の日記に登場する「寺田君」は、長身で、洒脱な中に落ち着いた雰囲気があり、しかも「理科の助教授、すでに博士」だったため、日本人留学生の間では一目置かれていたようです。

中でも元々文芸を愛好し、一高時代の親友・森田草平の案内で漱石山房に押しかけたこともある亮一は、寺田君と俳句や謡や芝居や「夏目さん」や「森田」の話ができることがとても嬉しく、それだけに、一足先に次の留学地に向かう寅彦を駅に見送ったときは「何だか惜しいような、なつかしいような気がした」と書いています。

相前後して彼地を出発することになった寅彦と亮一のために仲間達が催してくれた送別会の席上で、寅彦は「よさこい節」をうたい、亮一はそれを「土佐の人だから」と日記の中で説明しています。ちなみに亮一は河内の出なのですが、このときは河内音頭ではなく、得意の謡曲「蝉丸」（花の都を立ち出でて）を披露しています。

その数日後の日曜日、いよいよ寺田君が出発するというので、亮一は徳島出身で寅彦とは大学の物理で同期の「林君」と一緒に寅彦の下宿に赴きます。そこに同じく高知出身の森医学士が加わり、汽車の時間まで四人で珈琲を飲みながら雑談するのですが、まるで若い書生同士のように、「例により毒口のつきあい」が始まります。日記にはその模様が次のように書かれています。

「寺田君は土佐の人なので、土佐の話が出る。高知の港のまずいこと、人物の出ないこと、産物のないことなど、僕が散々悪口を言うと、あいにく森も土佐、林は徳島で三人とも四国なので、今度は三人連合して四国のよいことをほめ出す。世界に比なき大きなアンチモニーが四国から出ること、どこの博物館にも四国のアンチモニーが出ていること、岩崎は土佐の出なること、讃岐の琴平神社、土佐のかつおのうまいこと、道後の温泉、別子の銅山、犬のけんか（土佐の名物）など、お国の自慢が出る。何だドイツ三界まで来て土佐の自慢をして見た処で始まるまいとて大笑い。」

この中で「岩崎」が出てくるのは、亮一の保険会社が三菱系であることを意識しての強烈なカウンターパンチと思われますけれども、いずれにしても寅彦は、異国にあってもこのように「お国」のことを思っていたのです。

郷里を持たない、つまり江戸っ子ではない東京人として生まれた私は、寅彦全集の中にもしばしば登場する「お国」という言葉にとても憧れます。

幸い祖父の留学日記のおかげで実現した寅彦の郷里・高知への初旅は、そんな私に心のふるさとを作ってくれたと言えるかもしれません。そうだとすれば、それはまさしく「天から送られた贈り物」にちがいありません。

（東京在住）

高知県立文学館

◆次回企画展紹介◆

「愛の手紙展 ～文学者の様々な愛のかたち」

2003年2月4日(火)～3月16日(日)

今回の企画展「愛の手紙～文学者の様々な愛のかたち～」は、日本近代文学館のご協力により、日本の近代の文学者四十人あまりが折に触れて大切な人に宛てた手紙の直筆を中心にご覧いただく展覧会です。

愛の手紙展に関して、日本近代文学館理事長の中村稔先生が「愛の手紙～文学者の様々の愛のかたち」(日本近代文学館編、青土社刊)の巻頭でもおっしゃっておられますように、小説、詩歌、その他の文芸作品においては、本来公表を予期し、未知の読者、多数の読者に宛てて、書かれるものであるのに対し、書簡は公表を予期することなしに、特定の名宛人に宛てて書かれるものです。

このため、書簡はプライヴァシーに属する事柄に触れることが多く、中には公表できない場合も多くあります。

しかし、作品の執筆動機をはじめ作品の理解の鍵となる、貴重な文学資料の一つとなる場合が多いのです。

先ほども述べましたように文学者の書簡は、公表を予期することなく、特定の名宛人に宛てられてかかれているので、文学者の肉声を聞くかの如き興趣があります。文学者の人柄、人格が、作品よりも書簡からより鮮明に窺われることは決して稀ではありません。

優れた文学者は、多くの場合、書簡文学とも言うべきすぐれた手紙の筆者なのです。

このことは今回の企画展でご紹介する「愛の手紙」においてことに顕著です。

今回の展覧会では、第一部「愛する人へ」、第二部「妻へ」、第三部「家族へ」の三部構成に「土佐人の愛の手紙」(仮題)のコーナーを設けます。

これらの書簡から、愛する人たちに対する、高揚した、あるいは苦悩に満ちた、あるいは情熱的な様々な愛のかたちを、妻に対する、優しさ、あるいは心遣いのこまやかな、あるいは葛藤をともなった心情のすがたを、また、肉親に宛てたものでしかみられないような、機微にふれ、赤裸々に事実をあきらかにし、あるいは血肉のつながりの強さを教えられる文学者のさまざまな感情の表現を読み取っていただける事と思います。

今回の企画展を通して多くのみなさまにすぐれた文学者の「書簡」から多様な愛情のあり方、その表現と筆者の人柄、人格を感じ取っていただければと願い、この企画展を開催いたします。

―○―○―

第一部「愛する人へ」では、

※北村透谷から石坂ミナへ、※半井桃水から樋口一葉へ、※田村俊子から岡田八千代へ、※萩原朔太郎から馬場ナカへ、※島木赤彦から今井邦子へ、※深尾須磨子から平戸廉吉へ、※島崎藤村から加藤静子へ、※谷崎潤一郎から根津松子へ、※斎藤茂吉から永井ふさ子へ、※立原道造から若林つやへ、※太宰治から山崎富栄へ

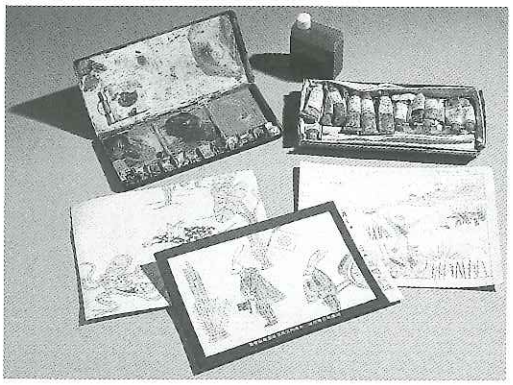
―○―○―

第二部では「妻へ」では、

※福地桜痴からさとへ、※二葉亭四迷から柳子へ、※夏目漱石から鏡子へ、※有島武郎から安子へ、※大町桂月から長へ、※芥川龍之介から文へ、※室

太宰治絵画 「他画他讃自讃する人もありき」

有島武郎 妻、安子宛(大4・2・12)



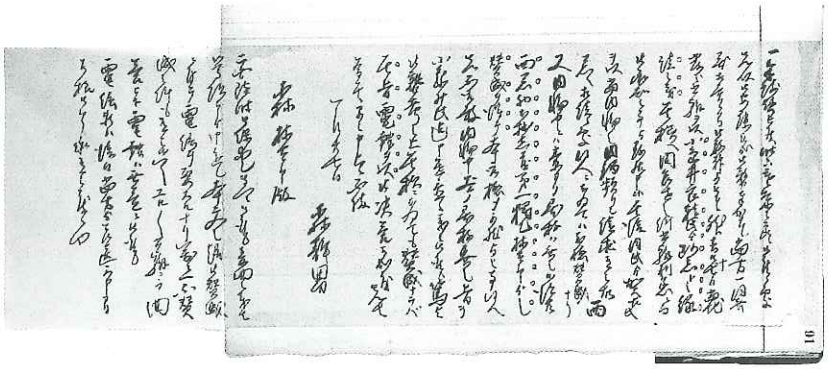
高見順の絵の具セットとスケッチブック

生犀星からとみ子へ、※高見順から秋子へ、※加藤道夫から治子へ、※川口松太郎から愛子へ

――○――○――

第三部「家族へ」では、

※森静男から長男森鷗外へ、※池辺三山から弟穫三郎へ、※樋口虎之助から妹一葉へ、※萩原朔太郎から従兄英次へ、※石川啄木から妹光子へ、※岡本かの子から兄大貫雪之助へ、※与謝野寛・晶子から子供たちへ、※芥川龍之介から子供たちへ、※里見弴から兄有島武郎へ、※有島武郎から母幸子へ、※平戸廉吉から姉岡村文子へ、※長谷川時雨から妹春子へ



森静男書簡、森鷗外宛（貼込帳）

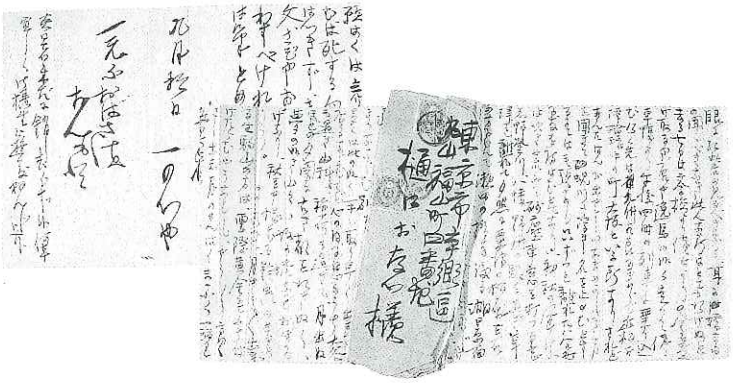
――○――○――

第四部「土佐人の愛の手紙」では、特に

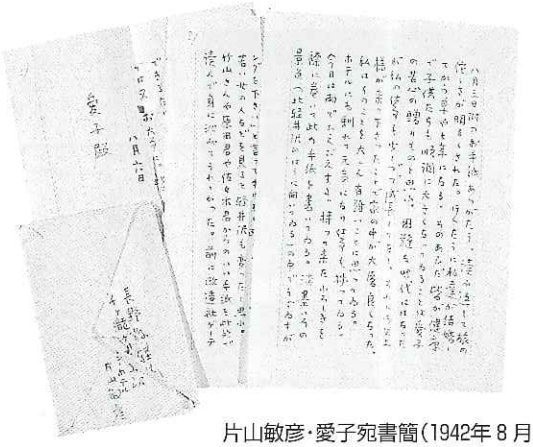
※馬場孤蝶から樋口一葉へ、※片山敏彦から妻愛子へ、※幸徳秋水から母へ、※寺田寅彦から子供たちへ、父利正へ

といった書簡の展示を予定いたしております。また、書簡を中心に文学者ゆかりの品々を各コーナーごとに、ご紹介いたします。

（津田加須子）



馬場孤蝶から樋口一葉宛（明治28年9月11日付）



片山敏彦・愛子宛書簡（1942年8月6日）

会期／平成十五年（二〇〇三）一月四日（火）～三月十六日（日）
開館時間／午前九時～午後五時（入館は午後四時三十分）
休館日／月曜日・二月十日、十七日、二十四日、三月三日、十日
会　場／高知県立文学館　特別展示室
観覧料金　一般五〇円　高校生以下無料
※二十名以上の団体は二割引き
主　催　高知県立文学館
監　修　中村　稔（詩人・日本近代文学館理事長）
十川信介（学習院大学教授・日本近代文学館専務理事）
協　力　（財）日本近代文学館

＜主な展示資料一覧＞

※夏目　漱石　妻鏡子宛て書簡（巻紙）
※森　　鷗外　父森静男　森鷗外宛て（貼込帖）他　**約40名の書簡**
※太宰　　治　絵画「他画他讃自讃する者もありき」
※芥川龍之介　遺品　机、ペン皿、ペン、インク壷など
※加藤　道夫　原稿「なよたけ」
※萩原朔太郎　「ソライロノハナ」原稿、書籍　**他全250点**

記念講演会

日　時　三月二日（日）午後二時～三時三十分
場　所　高知県立文学館1階ホール
講　師　十川信介氏（学習院大学教授・日本近代文学館専務理事）
演　題　「一葉と『文学界』の人々」
入場無料　先着一〇〇名
※はがきにてお申し込みください。
住所・氏名・年齢・電話番号明記の上あて先　〒780－0850　高知市丸ノ内一－一－一〇　高知県立文学館「愛の手紙展」記念講演会係

講師紹介

十川　信介　氏

一九三六年北海道生まれ。現在学習院大学教授。主著に『二葉亭四迷論』『島崎藤村』（第13回亀井勝一郎賞受賞）『「銀の匙」を読む』『明治文学回想集上下』など。「愛の手紙～文学者の様々な愛のかたち～」監修者。本展にさいし「愛の手紙」（日本近代文学館編　青土社刊）の解説を書かれている。

学芸員メモ

寺田寅彦展－天然に育まれし眼差し－より

展示室より

「ねえ君、不思議とは思いませんか？」寺田寅彦が研究室の弟子たちに問いかけた言葉である。寺田寅彦の随筆を読んでいると、日々を過ごす中、この「不思議」と思うことを忘れていたことに気づかされる。そして、寺田寅彦の随筆は、色々な「不思議」を見いだす力を、今なお、私たちに与えてくれるものではないだろうか。

理化学研究所の所長・大河内正敏は寺田寅彦に向かい「君は学者になってよかった。なっていなければ、こんなになんでもできるのだからたいへんな道楽者になっていた」と言ったと伝えられている。寺田寅彦は、物理学者としてユニークな研究を進めながら、文学、美術、音楽などの芸術分野の表現にも取り組んだ。これらは万華鏡のように無限に広がりながら関係しているが、展覧会では、そのような魅力を充分伝えることができなかったのではないかと反省する。

展覧会は、寺田寅彦の軌跡を断片的に紹介したものにすぎなかったが、関係者のご協力により、新たな資料の発見があったことは望外の喜びである。

それは、寺田寅彦記念館友の会会報「槲（かしわ）」三二号に寅彦の次女・関弥生さんが寄稿された「板橋の家」が縁となり発見された寅彦の交流を物語る遺品の帽子である。

寅彦は大正八（一九一九）年十二月五日東大の研究室で胃潰瘍のため吐血、そのまま大学病院三浦内科に入院。幸い経過は順調で十二月二八日には退院するが、その後、自宅で長期の療養生活を送ることになる。この療養中に油絵によるスケッチを始め、やがて、次第に健康を取り戻すと戸外での写生に取り組み、武蔵野の風景を描くうち、自然の中で過ごせる場所を持ちたいという希望を強く持つようになる。

そして寅彦は、古くからの知人である板橋在住の白井三代吉・ふよ夫妻に相談し、板橋の志村中台にある土地を紹介され、「板橋の家」が建てられることとなった。

寅彦が亡くなったとき、白井夫妻は愛用の帽子を形見分けとして受け取り、そして白井氏の長女・南雲ノブ子さんに伝えられ、戦火を逃れ大切に保存されていたのである。

遺品の帽子

関弥生さんによると、この帽子は昭和七（一九三二）年に寅彦が札幌に旅行した時のものだとのこと。旅行をあまり好まなかった寅彦にとって、この札幌行は楽しい旅行であったらしく、弟子の中谷宇吉郎が撮影した写真のくつろいだ様子を気に入り、焼き増しを頼む手紙を送っている。

展覧会では、「板橋の家」の写真や寅彦の手帳に記された設計プランなども展示したが、展覧会をご覧になったお客様から、その設計に関して、文化学園の創立者の一人であり日本の家屋建築にも革新をもたらした西村伊作に相談した様子が日記（一九二一―二二）に残されているとの情報もいただいた。（西村伊作と寺田寅彦は、明治四二（一九〇九）年ヨーロッパに向かうドイツ郵船ブリンツ・ルドウィッヒ号に乗り合わせていた。明治四二（一九〇九）年三月にアメリカに留学中の弟・大石真子（まるこ）から肋膜炎になったという手紙を受け取った西村伊作は、祖母を説得して外遊することになり、三月二〇日頃横浜から乗船。一方寅彦は三月二八日に神戸から同船に乗り、欧州留学に出発している。四月六日に香港に寄港、伊作が上陸して本屋に立ち寄ったとき寅彦と出会い、共に植物園を見学している。ケーブルカーにも乗車。五月二日にイタリアに到着するまでの間、二人の交流は続いている。）

また、十一月五日には平成十四年文化人郵便切手が発売されたが、今回の切手には、寺田寅彦と関係のある正岡子規・田中舘愛橘・鳥居清長の三人が取り上げ

札幌での寅彦

貴船神社（高知市種崎）

られたことも不思議な縁と思われる。上京したばかりの寅彦が夏目漱石に紹介を頼んだ正岡子規を訪ねたときの想い出をつづった未発表作品「根岸庵を訪なう記」をローマ字で書いたものが「初めて正岡さんに会った時」であるが、高浜虚子に宛てたメッセージに「私が此を書いた主な目的は私等が将来の国字として用ゐたいと思って居る所謂日本式羅馬字で此の種類の文章を書いて見て、それがどんな感じを自分や他人に与えるかという事を知りたい」としている。寅彦はローマ字を使った文章も沢山残しているが、これは東京大学で物理学の恩師であった田中館愛橘や田丸卓郎が熱心なローマ字国字論者であったことの影響が大きい。また、鳥居清長は、寅彦が「浮世絵の曲線」の中で、浮世絵美人版画を考察して、全体の効果のために人物の手の描き方が扇子や煙管と同等の些細な付可物（アペンディックス）として取り扱われていることを挙げ、「清長などもこの点に対するかなりな自覚をもっていたように思われる。このアペンディックスが邪魔にならないようにかなり苦心を払っているような形跡が見える。少なくともこの点では清長の方が歌麿よりも遥かに優れていると私は信じている。」と評価した浮世絵師であった。

文化人切手は、昭和二十四（一九四九）年から二十七（五二）年にかけて第一次のものが発行され、平成四（一九九二）年から第二次として毎年発行されている。

第一次には十八名が取り上げられ、この中には夏目漱石、正岡子規、寺田寅彦が含まれている。第二次文化人切手で寅彦ゆかりの人々としては、平成十二年に東大の物理学の師である長岡半太郎と弟子の中谷宇吉郎が揃って取り上げられている。

今年は、年間を通して寺田寅彦の関連企画を行っているが、展覧会会期中には、昨年修理を終えた遺品の蓄音機でレコードを聴きながらの朗読会や、寺田寅彦と最初の妻・夏子が療養していた種崎・長浜・須崎を訪ねる文学散歩を行った。また、三月には「寅彦のディナー」も予定している。このような企画は今後も折を見ては行ってゆきたいと思う。

（川島　郁子）

閲覧室から

『宮沢賢治という現象』

読みと受容への試論

鈴木　健司　著

2002年5月、蒼丘書林、¥3、500

宮沢賢治研究で知られる著者は、現役の高知大学教授。第一部では、『銀河鉄道の夜』を中心に、賢治の宇宙観、宗教観、心理学的な特性などをふまえつつ作品解釈をすすめ、第二部では、坂口安吾や大江健三郎らと宮沢賢治との比較研究。第三部の周辺研究では、高知出身の近森善一についての調査や、同時代の土佐の詩人・岡本弥太との関わりについて詳細に報告されている。

近森善一は賢治の生前唯一の童話集『注文の多い料理店』発刊にかかわった人物で、香美郡野市町出身。著者は、近森と賢治の関係がそれまで言われていた以上に親しいものであった可能性や、発刊に関わる経緯を、関係者たちの錯綜する様々な証言をもとに検証する。

また、香我美町岸本出身の詩人・岡本弥太は、当時まだ数少なかった賢治理解者の一人であったが、弥太の賢治に対する理解は、独自の視点に立った奥深いものであり、現在の研究にまで引き継がれていることなどを指摘している。

高知と賢治の知られざる関係や、賢治の作品をより深く読み解くためには必読の書といえるだろう。（佐）

県内同人誌紹介

『なんと』

我々はなんと文学を興し同人誌「なんと」を刊行している。平安の昔土佐の政治は南の都つまり南都（なんと）において行われた（現南国市）。先人はこの南の地の文化の息吹を図った（南図）。歴史に残る南都と南図を想い、なんとを創刊した。

大学に建学の精神があるように、我がなんとには創刊の決意がある。自然にふれて思うこと。世に訴えんとして、しること。土の温もりの中に草の香りのある作品を目指すこと。この創刊の決意は二十余年を経て四十五号を刊行しても少しも変わることなく、年二回のテンポで続けている。

なんと文学には気むつかしい会則など存在しないリベラルな集いで、加入、脱退は自由である。ただし情熱と原稿と会費を必要とする。

高知県立文学館を我が宗家と仰ぎ、常にご指導を賜っている。（田岡信雄）

発行所及び発行人

南国市白木谷七〇八

なんと文学代表　田岡　信雄

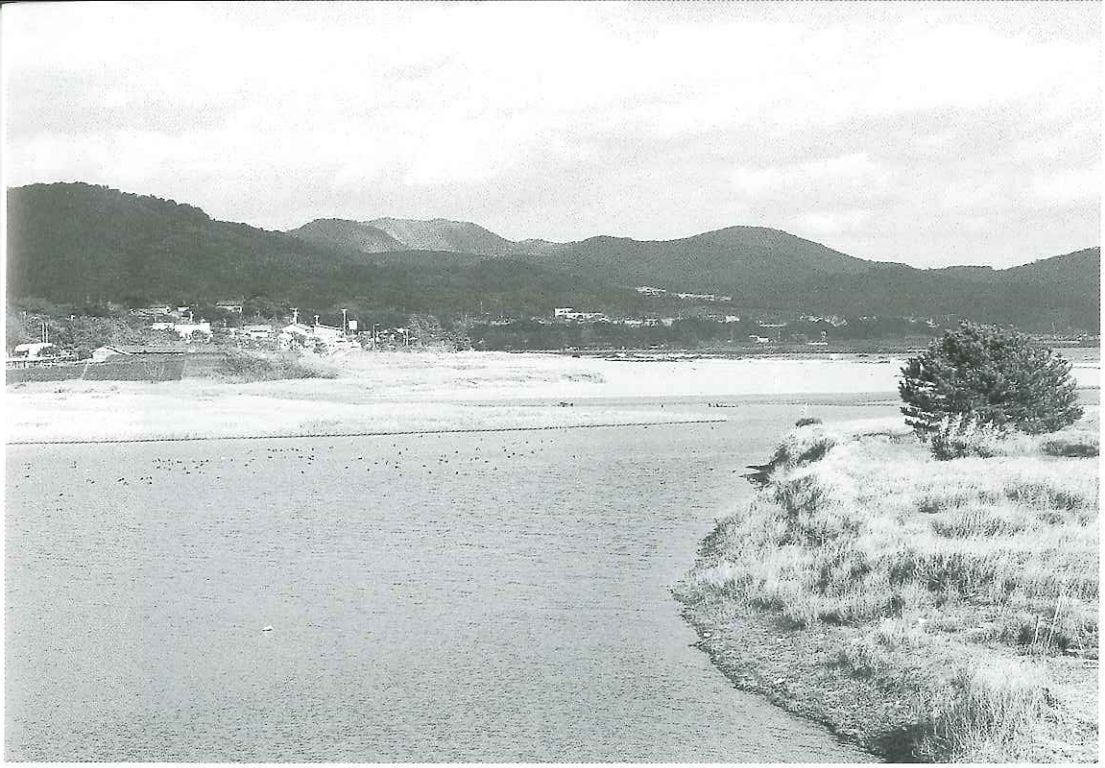
土佐文学さんぽ 17

タカクラ・テル（高倉 輝）

「波の音」より

婆さんは、入口の縁側へ行李を持ちだして、うつむいて、しきりにかき回している。六尺ゆたかの大女で、まだ腰も曲がらず、しゃっきりして、頭には白髪も目だたず、それに、ゆうべのおしろいが首のあたりにまだらに残っている。ただ、婆さんの鼻が、梅毒で、鼻柱のなかほどで、節のようにへこんでいるのが人目につく。

もう秋だが、この南の国の海岸では、夕暮れだというのに、海から吹く風は、まだ、しめっぽくなまぬくい。



浮鞭を臨む

土佐の近代文学者の中で、働く民衆の立場に立って闘いつづけた作家は、タカクラ・テル（一八九一～一九八六・高知県高岡郡口神川・現窪川町生まれ）ただひとりである。彼の当初からの根本命題「労働と生産」における理論と実践の烈しく軋み合った生きざまは終生揺らぐことはなかった。まさに〝不屈の男〟であった。

マルクス主義、ロシア革命、白樺派から大きな影響を受けたが、テルは当時の新思想を安易に妄信する楽天家ではなかった。むしろ懐疑の人であった。理想を実現するためには何を為さねばならないか。その姿勢においては、峻厳なリアリストであった。一事象に直面するとその根源まで遡って考察、研究する強力な思考力を身につけていたテルは、青白いインテリゲンチヤの枠を超えて、社会運動家、政治家と多面的な行動をラジカルに示した。

「労働と生産」を考察する上において、彼は〝生産手段としての言語〟まで遡る。日本各地の方言や敬語を、日本の封建性が生み出した蛮族語として斥ける。難解漢字、漢語を否定する。「ことばが生産手段である限り、生産手段としての機能を最もよく果たし得るものほどすぐれた言葉だ。そのためには余計な遊戯や魔術は非常な妨害となる。ことばは音韻的にも文法的にも語彙的にも単純化、平易化せよ」（「日本語再建」・昭一二 中央公論）と主張する。遊戯、魔術というのは、詩や音楽を生み出す言葉のこと。一例を挙げれば、万葉集の「風」に独立性はなく、コチ、ナライ、アラシ、ハヤテ等幾多の言葉があるのは余計なことと断じ、「風」は「風」でよいというのである。極端な簡素化である。そこで彼は、社会の発展に寄与するのは、今使用している働く民衆の言葉（国民言語）であると主張し、国民文学運動につなげた。

大正十一年、農民運動（長野県）にのめりこんだ時、農業理論からその基礎となる社会理論、日本農業史と一枚一枚、皮を剥ぐように研究を重ねた。彼は必然的にその〝土台〟まで突き進む完全主義者であった。

彼の生涯は、劇的なドラマに事欠かない波瀾にみちたものであった。大正十一年、菊池寛との確執による文壇ボイコット、昭和二年、治安維持法で投獄（以後三回の逮捕）。終戦を奥多摩刑務所で迎えた。昭和二十一年、衆議院議員当選、共産党中央委員に就任。昭和二十五年、参議院議員当選。公職追放。ソ連、中国へ九年間亡命――。

× ×

「波の音」はテルの唯一ともいえる郷土物の作品。大方町浮鞭（生後間もない頃より十二歳までここで育った）で遍路宿を営むおます婆さんはこれまで、七人の男妾を取り替えた多情な因業婆。つい先だって男妾が死んだのを機に、二人の息子が「もうたいがいにせんかよ」と引取りに行く。ところが婆さん、早くも後釜を構えていた、というユーモラスな短編。〝色情〟を突っかい棒にしてテコでも自分の生きざまを変えない婆さんに、骨太く一筋の道を貫いたテルの生き方が、硬軟正反対ながら、案外、おもりをおろしているとみるのは穿ち過ぎか。

小説「大原幽学」（昭一四）。小説「箱根用水」（昭二六）、が代表作。

（国則三雄志）

見どころ＝●大方あかつき館（上林暁）●入野松原●浮津海水浴場●ホエールウオッチング

交通＝JR高知駅より土佐入野駅下車。特急一日九本。一時間四〇分。

資料受贈報告（平成十四年九月～十一月）

敬称略

▼**坂本稔**・「（CD）猪木隆メモリアルコンサート 二〇〇一年神戸開催」▼**細木嘉壽子**・「（句集）春の星 細木嘉壽子 葦書房」▼**沢英彦**・「漱石と寅彦 沢英彦 沖積社」▼**青木淳**・「安田町・馬路村の文化財―仏像― 高知県地域文化遺産共同調査・活用事業編刊」▼**川村友一**・「日本の文芸 岡崎義恵 講談社」他▼**高知県歌人連盟**・「高知県短歌総覧第二集 高知県歌人連盟編刊」▼**横田晴光**・「男ありて ―志村喬の世界― 澤地久枝 文藝春秋」他▼**大鳥さわ子**・「ベレー帽 大鳥さわ子著刊」▼**船曳由美**・「変容する文学の中で上・下 菅野昭正 集英社」▼**佐々木靖章**・「系圖 田岡典夫 世界社」他▼**市原麟一郎**・「土佐の神仏めぐり⑤ 土佐の神仏巡拝 市原麟一郎 リーブル出版」▼**妻鳥季男**・「（歌集）人間經 吉井勇 政經書院」他▼**細田康弘**・「戦争と平和 全四巻 トルストイ著・馬場孤蝶譯 國民文庫刊行會」…**馬場孤蝶**（一八六九～一九四〇）は英文学者、翻訳家、随筆家で本名は勝弥。明治二年十一月八日、高知城下金子橋（高知市升形）に土佐藩士馬場来八と寅子の三男として生まれました。明治十一年父母と共に上京。体が虚弱で就学が遅く、小学校や商業学校をいずれも中退して、神田の共立学校（開成中学）に入学したのは十八年、十六歳の秋でした。二十二年共立学校を退き明治学院に入学。そこで島崎藤村、戸川秋骨らと知り合います。二十四年六月卒業、十二月高知の共立学校に英語教師として赴任します。二十六年八月上京し日本中学に

◆◆◆ 文学館日誌 2002年9月～11月 ◆◆◆

9月

◆1日　吉井勇関係8名様ご来館。◆4日　木村千春氏ご来館。朗読コンクール審査員打ち合わせ。徳島城博物館主任学芸員・根津氏ご来館。◆7日　専門講座「寅彦と漱石Ⅰ」講師：沢英彦氏。参加者40名。◆12日　「田岡典夫没後20年」展開幕。10月14日まで。◆14日　寅彦とシネマ「モロッコ」（1931年：米91分）午前11時～、午後2時～。参加者午前28名。午後40名。◆15日　田岡典夫の肉声を聞く会。「野中兼山のこと」午後2時40分～午後4時。参加者12名。谷俊宏様ご家族4名（田岡典夫同級生）ご来館。◆16日　ビデオ上映会「色ごよみ権九郎旅日記」（1953年：東宝・森繁久弥・伴淳三郎ほか出演）参加者26名。田岡典夫の肉声を聞く会。「野中兼山のこと」参加者4名。◆19日　丸ノ内高校の新任の先生方4名と教頭の池村明子先生がご来観。◆21日　第30回朗読の会。第1部「田岡典夫とその作品について」解説高橋正氏。第2部作品朗読「白狐の船路」（松田光代氏）「海鳴り」（野中久美子氏）参加者25名◆26日　上林あかつき館3名ご来館。◆28日　映画上映会「権九郎旅日記」（1961年：東映・市川右太衛門出演）。県立美術館ホール。参加者午前96名。午後88名。1961年当時の浦戸湾や桂浜、芸西村琴ヶ浜などロケ地のなつかしい風景映像が郷愁をさそった。◆29日　かみしばい研究会例会。

田岡典夫を偲ぶ記念講演会を終えて。前列右から中安百合子氏、山村瑞子氏、講師の船曳由美氏、1人おいて、佐久間淑子氏、本木公子氏ら

10月

◆2日　俳優児玉清氏ご来館。◆4日　船曳由美氏、竹村文男氏、佐久間淑子氏、本木公子氏、山田一郎氏ほかご来観。◆5日　田岡典夫を偲ぶ記念講演会。講師はフリーランス編集者の船曳由美氏。演題「田岡典夫先生の思い出」参加者75名。田岡典夫令妹の佐久間淑子氏・本木公子氏、中安百合子夫妻とご子息健一郎氏ほか、金沢典子氏、山村瑞子氏、前川竜女氏、名木田恵子氏、山田一郎氏、小椋克己氏など多くの関わりのあった方々も参会、故人の思い出やエピソードを語られた。◆6日　上林暁生誕百年ミニ企画「兄の左手」終了。◆12日　専門講座「寅彦と漱石Ⅱ」講師：沢英彦氏（詩人・文芸評論家）参加者41名。◆13日　西田勝氏ご来観。かみしばい研究会例会。◆14日　「田岡典夫」展終了。明問中総入館者1412名。ビデオ上映会「色ごよみ権九郎旅日記」（1953年：東宝）参加者32名。◆20日　寅彦とシネマ「商船テナシティ」（1934年：仏71分）午前11時～、午後2時～。参加者49名。

田岡典夫展では1930年パリ遊学時代に典夫が着用したコートや帽子も展示

10/5　「田岡典夫先生の思い出」をご講演中の船曳由美氏

11月

◆1日　寅彦とシネマ「或る夜の出来事」（1934年：米110分）午前11時～、午後2時～。参加者44名。◆3日　開館5周年記念特別展「寺田寅彦展」開幕1月5日まで。◆9日　平成14年度文学カレッジ①「安岡章太郎の『流離譚』について講師：高橋正氏。参加者30名。◆10日　地域連携交流事業。松江17名、尾道14名、今治20名、高知6名、高知市教育委員会生涯学習課5名ご来観。◆14日　追手前小学校観覧。生徒48名引率者3名。城西中学校観覧。生徒36名引率者2名。◆16日　朗読の会特別企画「寅彦の蓄音機を聴く」参加者60名。◆17日　かみしばい研究会例会。◆21日　池川中学校観覧。生徒43名引率者11名。◆24日　第5回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査。午後1時～。（参加者80名）。記念講演会「ぼくが作家になったわけ～ズッコケ三人組からのメッセージ～」。講師：那須正幹氏。金賞：畠山園佳（土佐女子中学3年生）特別賞：布悠斗（十和村立十川小学校3年生）郷土文学賞：戸田朝子（高知市立潮江東小学校4年生）。◆26日　牟岐町立図書館来館。9名。◆28日　ギャラリー・トーク。担当学芸員による解説。午後2時～午後3時まで。◆30日　文学散歩。寅彦の文学の足跡をたずねてバスツアー。参加者45名。高知から須崎へ。講師：恒石直和氏（寺田寅彦記念館会長）、特別参加・上田寿氏（高知医科大学名誉教授）。

11/24　朗読コンクール県審査（上段中央・那須正幹氏）

11/16　「寺田寅彦の蓄音機を聴く」

職を得、「文学界」の同人として文筆活動に入って行きます。「文学界」誌上で『酒匂川』など六篇の長篇新体詩、『片羽のをしどり』など五篇の文語体小説、数篇の評論・随筆を発表するなど創作中心の活動が続きました。やがて大陸文学の翻訳・紹介などに力を入れるようになり、それは『やどり木』（三十六年）『泰西名著集』（四十年）などに結晶してゆきます。三十九年一月上田敏、森田草平らと「芸苑」を創刊。この年、約九年間在職した日本銀行を退職し九月から慶應義塾大学の教授になりました。昭和五（一九三〇）年三月この職を辞し晩年は文筆活動を中心に過ごしました。昭和十五年六月二十日肝臓癌で死去。七十一歳。孤蝶は生涯において数多くの作品を発表していますが創作よりむしろ翻訳・随筆で本領を発揮し名声を得ました。今回寄贈いただいた『戦争と平和　全四巻』（大正四～五年刊・再版）もその一つで、ロシア語から英訳されたものを翻訳したものです。初版は大正三～四年でこの作品の邦訳としては最初のものです。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

『戦争と平和』　全4巻

高知県立文学館ニュース　第十九号　平成十五年一月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内二丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇二三二　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2003年

1～3月

1月――January	2月――February	3月――March

講座等

文学カレッジ

第3回…1／12(日)「宮沢賢治―土佐との関わり」　講師:鈴木健司氏
第4回…2／1(土)「高知の詩人」　講師:小松弘愛氏
第5回…3／8(土)「鹿持雅澄について」　講師:榊原忠彦氏

―― 各13時30分～15時、文学館1階ホールにて ――

＜定員＞ 50名　※文学カレッジの募集は終了しましたが、余席があれば当日参加も受け付けます。

催しもの

寅彦YEAR! 寅彦とシネマ

●第5弾「三文オペラ」
(1931年・独米・108分)

＜日時＞ 1月19日(日)
①11時～　②14時～
＜場所＞ 文学館1階ホール
※入場無料
＜定員＞ 50名(当日先着)

寅彦YEAR! 寅彦のディナー

寅彦の好きだった味覚などをフレンチにアレンジ!?
寅彦の随筆の朗読、ピアノ演奏などもあります。

＜日　時＞ 平成15年3月1日(土)　18時30分～
＜場　所＞ ラ・プランセス(高知パレスホテル2階)
＜会　費＞ 5,000円
＜定　員＞ 先着40名(グループ等でお申し込みの方は、お席を近くにご用意できます。)
＜募　集＞ 平成15年1月15日～2月15日
＜募集方法＞ ハガキ、又はFAXに郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、文学館「寅彦のディナー」係まで。

企画展示室

「愛の手紙展」
～文学者の様々な愛のかたち～

＜期間＞2003年2月4日(火)
～3月16日(日)

夏目漱石、芥川龍之介、太宰治など文学者40余人が愛する人、妻、家族などに宛てた書簡や、文学者達ゆかりの品々によりさまざまな愛の表現を探ります。

関連企画

◇記念講演会(定員100名)
「一葉と『文学界』の人々」
講師：十川信介先生
(学習院大学教授)
(日本近代文学館専務理事)

＜日時＞ 3月2日(日)14時～15時30分
＜場所＞ 文学館ホール

ご好評につき会期延長　寺田寅彦展　～1／19(日)まで

【休館日】1月――1, 6, 14, 20, 27日　2月――3, 10, 17, 24日　3月――3, 10, 17, 24, 31日

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
休館日　毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)
観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●JR高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850